

池田 功
『啄木 新しき明日の考察』

(新日本出版社 二〇二二年)

西川 伸 一

歌人にして詩人の石川啄木を知らない日本人はまずいないだろう。しかし、啄木は一六歳くらいから文学的な活動をはじめ、二六歳二か月で夭逝している。活躍したのはわずか一〇年あまりにすぎない。その間に、日本はもとより世界的にも高い評価を受ける短歌や詩を残したのである。なぜそのような離れ業ができたのか。本書は啄木で博士号を取得した啄木研究の第一人者である筆者が、この謎解きに挑んだ労作である。

まず筆者は「三・一一」以降の日本の「時代閉塞の現状」に着目して、いままさに求められているのは啄木が最終的に唱えた「新しき明日の考察」であると主張する。啄木は「我々は一斉に起つて先づ此時代閉塞の現状に宣戦しなければならぬ。(中略)明日の考察!」これ実に我々が今日に於て為すべき唯一である、さうして又総てである。」(一九一〇年八月頃執筆)

筆)

そして、その境地に至るまでの啄木の成長過程を、豊富な根拠を示しながら丁寧に跡づけていくのである。筆者はその過程を「反転と反復による成長」とまとめている。そこに光を当てること、で、「謎」が徐々に解き明かされる。

たとえば、啄木の天職観である。啄木は小学校の代用教員や新聞社勤務で生計を立てていた。ただ、これらは彼の意識では「兼職」にすぎなかった。彼は文学を「天職」と自覚していた。しかし、生活者としてのいい加減な態度を妻から批判されて、彼の天職観は反転する。生活をおざなりにした文学的な生き方を自己批判するに至るのである。歌集『一握の砂』に収められている次の歌は、「天職」をめぐる苦悩するその頃の啄木の心情が表れているという。

こころよく

我にはたらく仕事あれ

それを仕遂げて死なむと思ふ

あるいは、同じ『一握の砂』の冒頭一四首に注目す

ると、それまで啄木が著した随筆や小説のイメージが反復されていることがわかる。それは海や砂浜、蟹であつたり、死や初恋、母であつたりする。それらのイメージが作品ごとに反復させられ、豊かさを増していく。ちなみに、啄木と蟹といえは、すぐに思い起こす歌がある。

東海の小島の磯の白砂に／われ泣きぬれて／蟹と
たはむる

この歌は『一握の砂』の巻頭に置かれている。マクロな景色からミクロな景色へ、わずか三文字の間に、パラシュートで地球へ帰還した宇宙飛行士の目に映じたものが再現されているかのようである。この痛快さに私は啄木のスケールの大きさを思い知らされた。一方、「蟹」と「涙」と「戯れ」については、それ以前の「蟹に」という詩にモチーフがあるという。それが先の冒頭歌において反復・増幅されているのである。

ところで、私は政治学を研究しているので、韓国併合や辛亥革命といった大事件や社会進化論の流行に、啄木がいかに向き合ったかを興味深く読んだ。

韓国併合には「墨塗りの歌」を詠んで、憐憫の情を吐露したことは有名である。版図拡大に沸く時代の気分には、啄木は流されずに事の本質を見据えていた。さらに啄木の憐憫の情は、伊藤博文を暗殺した韓国人のテロリスト安重根ばかりか、当時地図上から姿を消していたポーランドにも、大英帝国の植民地であつたインドにも向けられた。啄木による敗者や亡国への憐憫の情は、一貫していた。

また、辛亥革命の報せに接しては、病床にあつて「寝たり起きたり」の自らの閉塞状況を反転・打開させる希望を見出すことになる。「支那へ行きさへすれば、病氣などはすぐに直つてしまふやうな気がします」と書くほどに、啄木は隣国での革命に強く共感したのである。二六〇年以上長らえた専制国家が打倒され、共和国が樹立されるという歴史的局面に、新しい明日への熱い思いをたぎらせた。しかもそれは、場当たり的な思いつきではなかつた。啄木は漢籍に精通しており、それを下敷きに中国には強い関心を寄せていた。中国人とも交流があり、中国に関する文章も書いている。

一方、のちにナチスに重用される社会進化論に対し

ては、啄木は当初無批判に同調していた。「優秀なる我民族」と書いた啄木自身、優秀な学業成績で競争を勝ち抜いてきたのだ。だが、ここでも啄木は反転する。自分自身が「適者生存」に敗れ社会矛盾に気づき、社会主義に傾倒していくのである。ついには上で引いた「時代閉塞の状況」を執筆し、国家権力を敵とする認識を得るに至った。その後は、無政府主義者クロポトキンの著書も手に取り、「相互競争」より「相互扶助」の重要性に開眼する。筆者は「相互扶助」をボランテニアと「現代語訳」している。名訳だと思う。

ついでながら筆者は、新潟県立吉川高等特別支援学校の校歌の作詞者でもある。筆者の出身地である新潟県中頸城郡吉川町は二〇〇五年に上越市に編入された。実は私も上越市の出身(旧高田市)である。そして、学部で勤務する新潟県出身の教職員による懇親会である「政経県人会」では、いつも楽しい時間を、啄木よろしく「反復」している。